「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（下）

伊藤　淳史

１　はじめに－問題の所在と本稿の目的－　　２　対象資料の特徴
３　資料認識の過程と問題の所在　　４　資料の集成と検討 (1) －鴨東地域北半－
以上は（上）（『京都大学構内遺跡調査研究年報2021・2022年度』所収）に掲載

５　資料の集成と検討 (2) －その他の地域－

前節までは，京都大学吉田キャンパス構内や岡崎地域といった鴨東地域北半で出土が報告されている資料101点を対象にして，資料の実査からの所見も交えつつ，基本的特徴や変遷などについて検討してきた。そしてそれらを，俗称の「塩壺」ではなく「厚手鉢形土器」と呼称していくことを提案した。ひきつづいて本節では，平安京域などその他の地域の資料について，報告文献をもとにしながら検討していく。

対 象 資 料　検討済みの鴨東地域北半以外について，2021年度末までに刊行された関連報告書を悉皆的に精査したところ，106点の資料を抽出できた。これらを，「洛東（＝鴨東地域南半）・洛南」「洛北・京北辺」「京域」「嵯峨野」「宇治・八幡」「湖西」として大まかに地域区分しながら，一覧表として末尾にまとめた（表２）。平安京・中世京都における発掘調査において決して稀少な資料ではないことから，このほかにも見落としや未報告の資料があることは十分に承知しているが，それでも何らかの傾向をうかがうことはできよう。

出土点数の推移　まず，これら106点と，さきに（上）で検討した鴨東地域北半の101点とあわせた207点の全体について，資料が使われた期間を把握するべく，出土している遺構の時期を集計した（図17）。その結果によると，13世紀前葉以前となる遺構からの出土でなかば以上が占められている。その後減少しながらも，14世紀後葉までは出土がみられ，15世紀代になると確実な形での出土はみられなくなる[(1)]。すなわち，平安後期に顕在化して以降，鎌倉前期をピークとしながら，室町前期ころまでの200年間程度使われ続けた器種，ということになる。

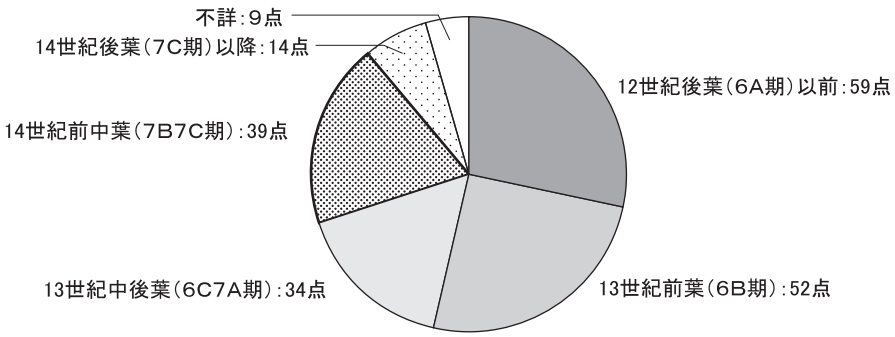


図17　対象資料207点が出土した遺構の時期

資料の空間分布　　次に，上記資料の出土地点の分布について，全体の様相を概観しておく（図18）。京域（以下，旧平安京の範囲についてはこのように表記する）外の出土地は，図中に１～15で遺跡名を付した。

京域では，出土が報告されるのは左京域のみであり，平安後期以降中世にも利用され続けた空間であることを明らかに反映している。密に出土があるこの左京域と鴨東地域，それと，それより疎ではあるが複数例の出土が確認される隣接地の上京から洛北にかけて，および洛東（鴨東地域の南半）・洛南・嵯峨野といった地域が，基本的な分布圏と評価できよう。これら諸地域も，古代末から中世にかけて，京域と密接にかかわる諸層の離宮や邸宅，寺社などに活発に利用された空間である。この基本的な分布圏内では，さきに述べた平安後期～室町前期ころまでの期間，継続的に出土が確認されている。

遠隔での出土　　一方で，やや離れた八幡，宇治，湖西といった地域では，のちに別途検討する宇治平等院境内遺跡を例外として，１遺跡１点程度の孤立散発的な出土が確認される。八幡市女郎花遺跡出土例（表２－198），宇治市木幡所在の浄妙寺跡出土例（同199）は，ともに，12世紀後葉～13世紀前半ころに比定される土師器皿類などとともに遺構から出土している。大津市上仰木遺跡例は（同207），包含層出土であるが，遺跡の主体は12世紀後半～13世紀にかけてであり，やはり同時期ころの製品と思われる。以上はいずれも鎌倉期までで，継続的で濃密な出土ではない。

八幡市女郎花遺跡は，古山陽道と東高野街道が交錯する交通上の要点に位置しており，また浄妙寺の位置する宇治市北部の木幡地域は，摂関家藤原氏一門と縁故の深い空間である。そして，大津市上仰木遺跡については，比叡山延暦寺と関連する富裕層の邸宅としての性格が示唆されている。つまり，厚手鉢形土器が京域で盛行する時期において，いずれ

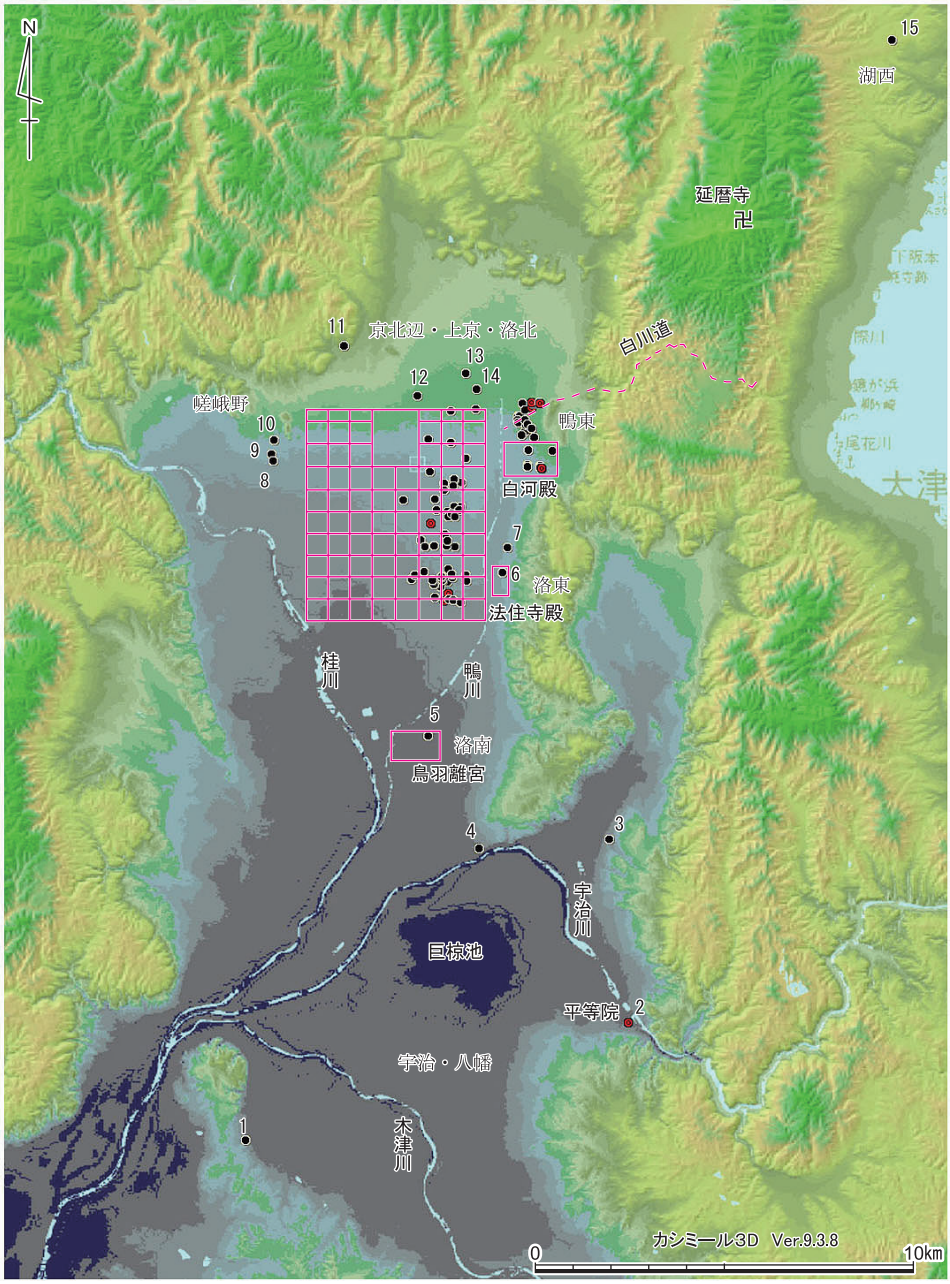


図18　対象資料の出土地点　（赤丸は５点以上の出土・縮尺1/20万）

1 八幡市女郎花　2 宇治市平等院　3 宇治市浄妙寺　4 伏見区桃陵　5 南区鳥羽離宮
6 東山区法住寺殿　7 東山区六波羅政庁跡　8 右京区一ノ井　9 右京区常磐仲ノ町　10 右京区常盤東ノ町
11 北区鹿苑寺（金閣寺）12 上京区上京　13 上京区相国寺境内　14 上京区常磐井殿町　15 大津市上仰木

の遺跡も人の移動に伴う京からの製品の搬入が生じうる性格を帯びていると評価できる。これら遠隔地にわずかに点在する製品は，在地での生産品ではなく，何らかの事情で上述した基本的な分布圏から運ばれ使用されていたものと考えるのが自然であろう。属性の少ない土師器皿類よりも，製品の移動を直接的に示すマーカーとして見出しやすいとも言え，今後さらに範囲を広げて意識的に探索する必要性を指摘しておきたい。

そして，以上の，遠隔地をも含めた分布状況で興味深いのは，京域から西南方の洛西や乙訓地域へとひろがる傾向は確認されないことである。これらの地域が，京域で主流の土師器皿とは特徴の異なる「乙訓在地形」などと称される土師器皿の分布圏であることを考慮すると〔伊藤ほか2016　pp.84-87〕，特異な厚手鉢形土器の製作と使用は，京域で主流の土師器皿類と密接に関連していることが予測されよう。ただし，これらよりさらに遠隔地でありながら，京との密接な関係にあり関連遺物の出土も知られる平泉・鎌倉・福原といった地域での出土は，現状では把握できていない。

形態や特徴の変遷　それでは，以上の諸地域の資料を対象として，（上）において鴨東地域北半で行った作業と同様に，遺構内で共伴する土師器皿類を手がかりにして変遷を検討してみよう（図19・20）。以下，形態の分類は（上）を踏襲し，皿類の編年と暦年代観は〔平尾2019〕にしたがっている。

明確に定型化した出現が把握されるのは，鴨東地域北半と同様に６Ａ期（12世紀後葉）である。Ａ形態としたような，体部が直線的なバケツ形の器形が目立つ（図19－１・５等）。ほか，全形をとどめた資料にとぼしいが，体部が半ばで屈曲するＢ形態や，ゆるやかに外反するＣ形態とみるべきものも存在はしている（同８）。また，鳥羽離宮では三足付の製品が出土しており（同11），（上）で紹介した白河街区での13世紀に下る出土例や，後述する左京四条一坊の資料（図20－84）の存在を考慮すると，こうした脚台が付される類型も存在したとみなして良かろう。そして，この12世紀後葉の段階は，形態にかかわらず口縁部周辺の仕上げがヨコナデとともにしっかりと施され，端部が上方に肥厚するような特徴が顕著といえる。すでに鴨東地域北半の資料で指摘しているが，これは，皿類の口縁仕上げ手法と共通する特徴で，二段撫で手法の消滅過程で口唇部に内傾する外端面が形成される段階の特徴とされるものである。

以上は，つづく６Ｂ期（13世紀前葉）にかけては様相は継続しているが，６Ｃ期（13世紀中葉）以降になると，明確な変化が看取されるようになる。以後は総じて小型化の傾向が進行しており，バケツ形であったＡ形態では，口径・底径ともに縮小してコップ形と呼

ぶのがふさわしいほっそりとした形態へと移行している（図19－29・35）。Ｂ・Ｃ形態は，小ぶりになりつつも引き続き出現しているが（同40～42），その後７Ｂ期（14世紀前葉）以降になると，目立たなくなる。14世紀代になると，各形態とも，口径が10㎝に満たないようなミニチュア品が顕著に認められるようになっており（同47・51・64・73等），あわせて，底部に穿孔があるものが確実に存在している（同55・70）。

小型化傾向の実相　こうした変化の方向性は，鴨東地域北半の資料からもすでに知られているところであるが，今回それ以外の地域の対象資料についてを付加して，あらためて時期別に口縁の法量分布を集計した（図21）。13世紀中葉以降の小型化傾向について，より明瞭に示されるとともに，口径が10㎝以下のミニチュア品と呼び得るような製品については，14世紀代以降に，鴨東以外の地域で顕在化している傾向がうかがえた。もっとも，いずれの地域でも，小型品に収斂しているわけではなく，少量だが大型品も存在はし続けている。器形をとどめた状態での出土に恵まれないことを考慮すると，大型品は破片化して報告に漏れ，本来はもう少し存在していたと見ておくべきかもしれない。

これらが消滅するのは，さきにも述べたように遺構からの出土がほとんど認められなくなる15世紀とみられるが，８Ｂ期すなわち14世紀後葉頃に比定される遺構出土資料でみると，底径が小さく口縁部側へ大きく開くコップ型器形と（図20－73），体部が直線的な筒状に近い器形（同78）の，大別すると２種類の形態へ収斂しながら衰退していった様相がうかがえる。また，稀少な製品ではあるが，脚付の大型品も鴨東地域北半と同様に存在していたことがわかる（同84）。この左京四条一坊跡の土坑ＳＫ12出土と報告される例は，外面に粘土紐積み上げ痕を明瞭にとどめる脚付（残存しているのは三脚）の鉢で，口径30㎝超の大型品である〔平安京調査会1975　図版66－Ｅ526〕。出土遺構は戦国時代の長方形土坑で，その上層の焼土層から出土し，火災後の廃棄による埋め立てによるものとされている〔前掲書　p.15〕。しかし，特徴からみて鳥羽離宮出土品（図19－11）などの三脚付資料に類する厚手鉢形土器であり，同じ調査で大量に出土している平安後期～室町期の資料が混入した可能性が高いのではないかと考えている。

平等院庭園出土資料の位置づけ　さて，以上のなかで，基本的な分布圏から外れながら７点が出土して特異さが際立っている宇治市平等院出土資料について，位置づけを再検証しておきたい。これらは，庭園整備事業12次調査阿字池西岸Ｐ－７区砂層下層出土資料の中に含まれる一群（図22－1254～1260）で，創建期（11世紀中葉）近い時期の遺物と報告されている〔宗教法人平等院2003　p.85〕。この位置づけが確かならば，100年以上製品

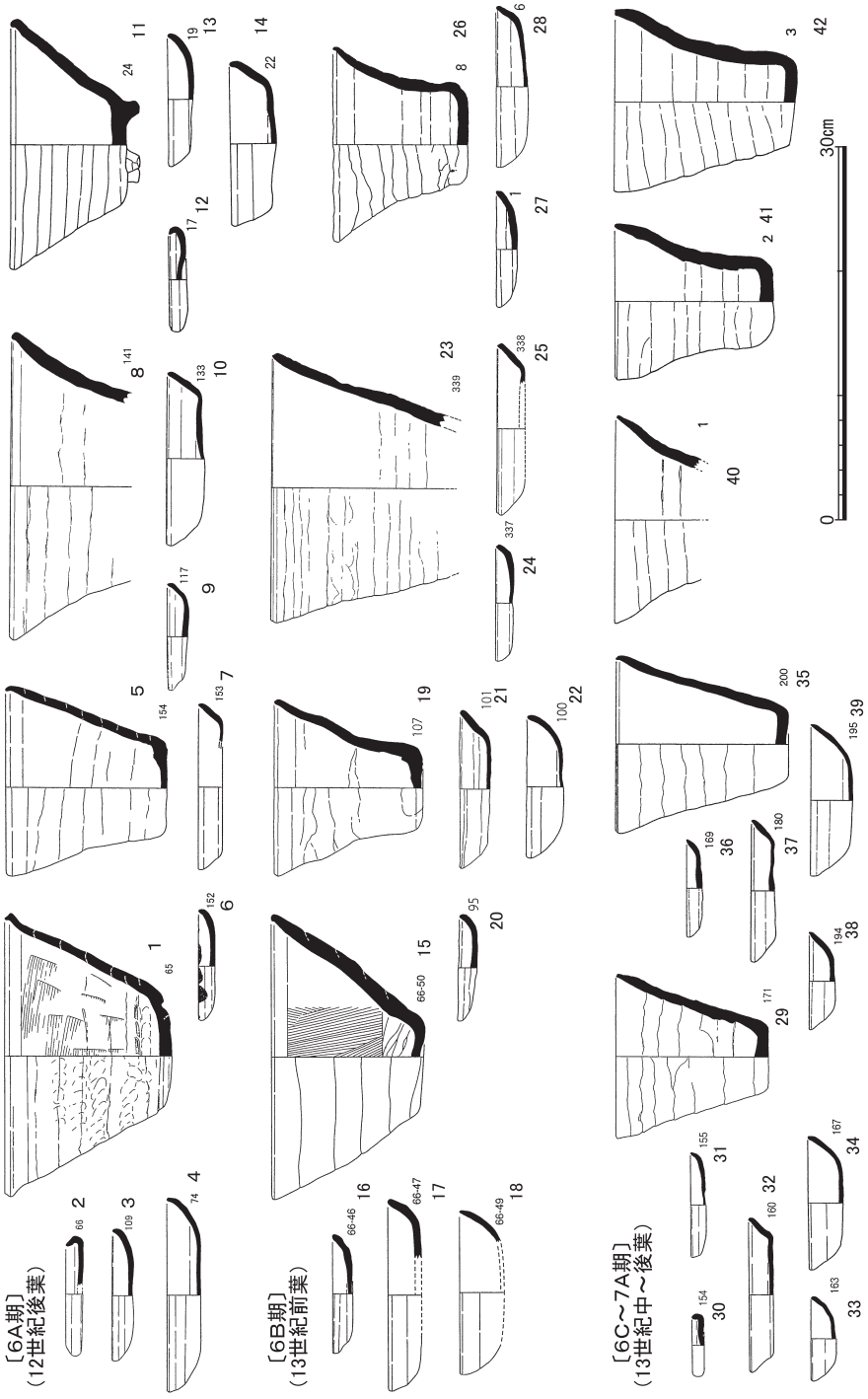
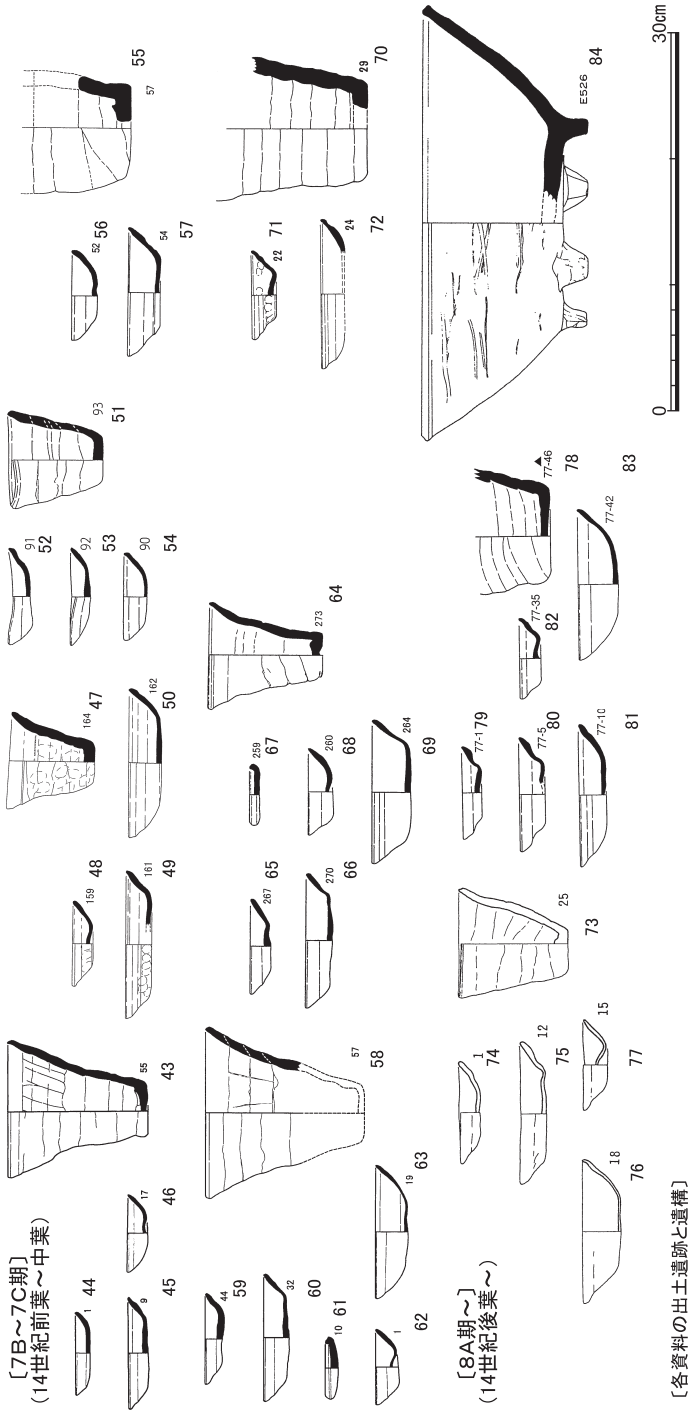


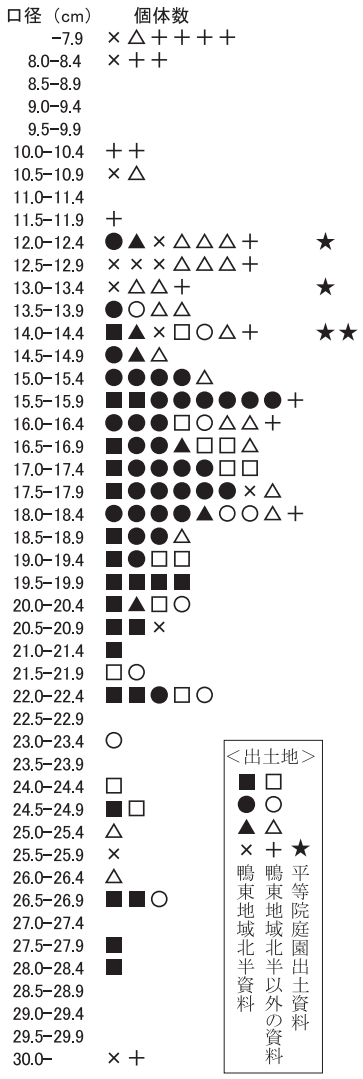
図19　厚手鉢形土器の変遷（鴨東地域北部以外・その１）　縮尺1/6



〔各資料の出土遺跡と遺構〕

1～4：六波羅政庁跡堀100
5～7：左京五条三坊七町跡土坑5188
8～10：左京八条三坊四・五町跡1区土坑137
11～14：鳥羽離宮跡88次SD1
15～18：左京北辺四坊跡井戸A309
19～22：左京八条二坊十五町跡井戸25
23～25：左京八条三坊四・五町跡1区土坑271
26～28：左京七条三坊五町跡SE131
29～34：左京二条三坊九町跡土坑107
35～39：左京五条三坊九町跡土坑108
40～42：左京五条三坊八町跡A・Bセクション第2・3層
43～46：左京六条二坊十四町跡SD19上層
47～50：左京二条四坊五町跡土壙3136
51～54：左京八条二坊十五町跡土壙20
55～57：鹿苑寺(金閣寺)庭園O区東側トレンチ
58～63：左京六条三坊八町跡SK376
64～69：左京四条三坊八町跡地下室581最下層
70～72：常盤井殿町遺跡SK308
73～77：左京四条四坊四町跡土壙墓S38
78～83：左京北辺四坊跡土壙B1035
84　：左京四条一坊跡SK12

図20　厚手鉢形土器の変遷（鴨東地域北部以外・その２）　縮尺1/6



＜共伴土師器皿にもとづく時期＞
■□6A期（12 世紀後葉）以前
●○6B期（13 世紀前葉）
▲△6C～7A期（13 世紀中葉～後葉）
×＋7B期（14 世紀前葉）以降

図21　時期別にみた口径の分布

の出現時期が遡ることになり，系譜や経緯を考える上でも無視できない存在であろう。

この砂層下層からともに出土したと報告される土師器皿は，口径10cm前後の厚手の「て」の字状口縁皿と（同1243～1245），口径13～14cm台の二段撫で手法で口唇部が外反する特徴の皿（同1246～1252）の２群である。京域の編年でみるとおおむね４Ａ期に比定できるといえることから，11世紀中葉ころの資料として差し支えないだろう。しかし，この報告で粗製の底部有孔土器と報告される厚手鉢形土器の特徴を持つ一群（同1254～1260）は，口径は12～14cmに収まり，焼成前穿孔される底部径は４～５cmと小ぶりな筒状やコップ形の器形になるものである。図21では★印で表示される。12世紀代の出現期にみられる特徴とは明らかに乖離しており，これらを祖型とする流れは想定しがたい。先述した時期別の変遷に照らすと，むしろ14世紀代の特徴を示しているといえよう。京域で同種の底部穿孔資料がみられるのもその時期であることも，傍証となる。

これらには，「尾廊南のＰ－７区からまとまって出土した」とする以上の記載は無く，出土状態を検討する手がかりを得られない。しかし，阿字池の池底上に堆積する砂層50～70cmについては，主に11世紀の土器類を含む層と15世紀代の土器群を含む大きく２層からなると報告されている〔前掲書　p.51〕。後者は，「砂層上層」として報告される土器群（図22－1231～1239）に相当するのであろう。これらの土師器皿は，京域での８Ａ期ころに比定しても問題ないと思われ，また当該の平等院報告書中での分類においても，14世紀後葉のＦⅣ類に分類されるものを含んでいる（例えば同図1234など）。すなわち上層の資料は14世紀代の

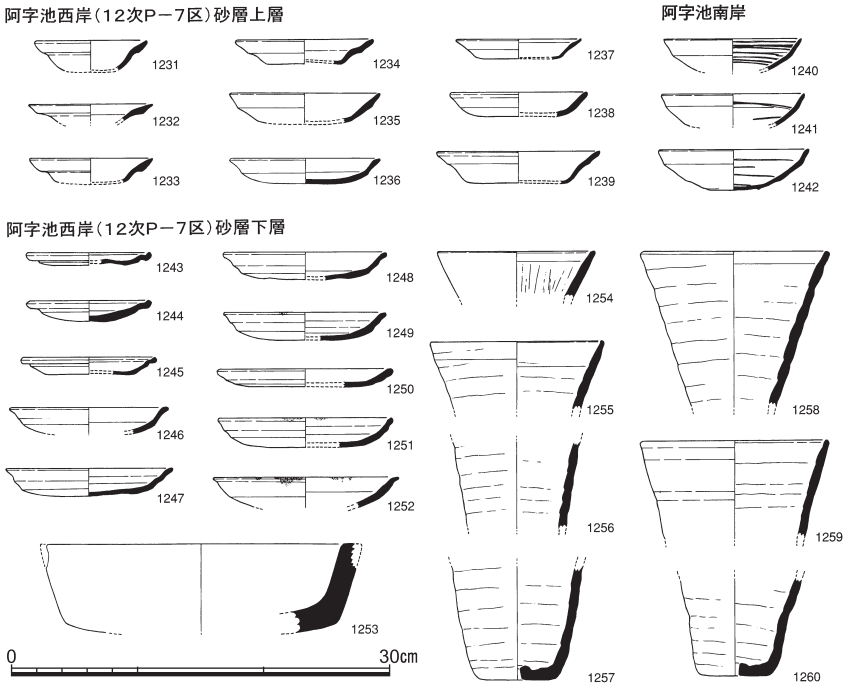


図22　平等院庭園阿字池西岸出土資料（『平等院庭園保存整備報告書』2003より縮小転載）　縮尺1/6

ものを含む内容と言っても差し支えない。したがって，下層出土とされる厚手鉢形土器1254～1260が，特徴からみて11世紀代とは位置づけがたいことの原因として，上層出土と認定すべき資料の混入によるものと判断しておきたい。結果，以下に述べていく系譜をめぐる議論の対象としてはとりあげないことになる。

6　製品の系譜と機能について

確実なところでは12世紀後葉に定型化したものが突然出現しているかのように思われる厚手鉢形土器だが，どのような技術系譜から出現しているのだろうか。この製品が担った機能についての問題とあわせて，最後に推察をめぐらしておくことにしたい。

先行時期の類似資料　　粘土紐の積み上げ痕が顕著に残される厚手の鉢形土器，という特徴の類似に注目すると，11世紀代にすでに存在は認めることができる。

なかでも注目されるのは，三条西殿跡（平安京左京三条三坊十二町）Ａ３土壙３出土資料である〔(財）古代学協会1983　第84図〕。この遺構からは，「て」字状口縁の皿と２段撫で手法の皿とが共存して出土しており（図23－１～６），11世紀中葉の４Ｂ段階ころに

比定できる。当該の資料（同１）は，全形は不明であるが，「復元口径24.2㎝の大形の鉢形土器で，粘土紐巻き上げ痕が明瞭に認められ，胴部外面は指オサエ」と報告されている。さらにこの資料は，図面上で見る限りは，口縁は短く外反して端部を上方につまみあげられるように仕上げており，平安中期頃までの「て」字状土師器皿や甕の口縁端部に顕著にみられる特徴を継承しているもの，とみることができる。出現期の厚手鉢形土器の口縁端部についても，こうした短い外反とつまみ上げがされる傾向が明瞭であり（例えば図19－１など），このような特徴の類似からも系譜的な関連がうかがわれよう。

このほかには，器形としては異なるが，平安京左京六条三坊五町で平安後期の楊梅小路南側溝とされる溝3250から出土している三足付の鉢が，注意される（図23－７）。内面は丁寧なナデ調整で火を受けた形跡があり，外面に粘土紐を巻き上げた痕跡がみられるという〔(財）京都市埋蔵文化財研究所2005　p.55〕。厚手鉢形土器にも足付の類型が存在することから，この資料も系譜的に関連する祖型となりうるものとみたい。なお，報告書ではより古い段階の資料と位置づけているが，同遺構出土土師器皿の主体（同８・９）が示すような，11世紀代に帰属する資料であっても良いと思われる。

また，これらより遡る10世紀代においても，粘土紐積み上げ痕が顕著とみられる土師器鉢そのものは，左京北辺四坊土壙Ｂ1013で報告されている（図23－10・11）。〔(財）京都市埋蔵文化財研究所2004　図版53〕ただし，やや小ぶりで口縁端部を丸く収めて仕上げており，時期的にも開きがあることもあって，直接的な関連を指摘するにはいささか躊躇さ

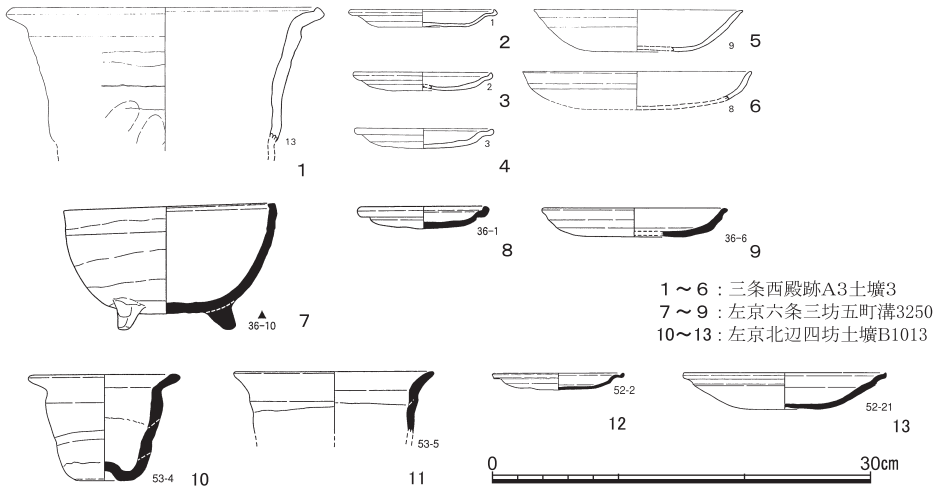


図23　先行する時期の遺構出土類似資料　縮尺1/6

れる製品ともいえる[(2)]。

製作技術の系譜と出現の背景　いずれにしろ，上記したような事例は10～11世紀代にほとんど類例を認めないイレギュラーな存在であり，器種として定型化したものとなっていない。厚手鉢形土器につながり得るような属性をもった先行時期の資料ではあるが，連続的なつながりを示すことはできず，出現する契機となった資料の候補として挙げ得るにとどまる。

そもそも，これらがイレギュラーな存在と見做されるのは，11世紀代までの鉢や甕の器形が古墳時代以来の丸底を基本としていることによる。そしてそれらは基本的に煮炊具であって，叩き成型と刷毛・削り等の調整による薄い器壁であることが一般的である。したがって，こうした製作技術の系譜からは厚手鉢形土器は生じ得ず，強度のある平らな底部に，杯や皿とは異なる厚手の器壁を高く積み上げていくためには，異なる系譜からの技術の流用や試行錯誤があったことも十分に推測されよう。

それを示唆する痕跡が，古い段階の底部を中心に多く認められている，丸みを帯びた形状や輪状の圧痕といえよう（図24－１）。鴨東地域での観察所見は，さきに（上）において底部の輪状圧痕諸例として提示し検討を加えたところであるが，凹形の型枠状のものを用いた底部の成型が想定できるような，丸底傾向の底部が確実に存在している。

ここで想起されるのが，時期は遡るものの，８～９世紀にかけて都城とその周辺で盛行する墨書人面土器に特有な製作技術である〔上村1992〕。これらは祭祀専用の甕形の容器であるが，凹形の外型を用いたとみられる底部と胴部との境界に明瞭な段が形成されてお

図24　厚手鉢形土器底部の輪状圧痕（左）と人面墨書土器底部の凹形成型痕（右）　約1/2
１：京都大学本部構内出土〔古賀1999　Ⅱ110〕　伊藤撮影
２：長岡京左京六・七条三坊出土〔(財）京都市埋蔵文化財研究所 1998〕
（公財）京都市埋蔵文化財研究所画像データベース（長岡京東南境界祭祀遺跡出土遺物43）の画像を京都市文化財保護課の許可を得て使用

り（図24－２），厚手鉢形土器底部にみられる輪状の圧痕（同１）ときわめて類似している。また胴部の外面についても粘土紐や粘土板を巻き上げた接合痕がそのまま残されているなど，一般の土師器甕とは異なる特徴をもつ〔前掲上村1992　第３図〕。いささか時間の隔たりはあるものの，これら諸特徴の厚手鉢形土器との共通性は注意されるのであり，平安京周辺の土師器製作集団に残されてきた製作の記憶が，技術的系譜の源流となり援用された可能性を，指摘しておきたい。

もっとも，厚手鉢形土器は，口縁端部は一段撫で面取り手法で仕上げるなど，同時期の土師器皿類と共通する技法が採用されていることも，既に鴨東地域で確認したところである。つまり，その製作は，基本的に京域や鴨東で使用される土師器皿類と同じ製作集団が担ったものと考えられる。はたして上記のような製作の記憶がそこに受け継がれてきたものなのか，状況に応じて独自に創意工夫した産物なのか，あるいは，煮炊具や祭具の製作集団が別に並存していたとして，そちらから援用するといった状況であったのか，現状では情報不足で全く決めがたいのが現実である。古代から中世にかけての土師器生産体制の変化を探るひとつのよすがとして，今後の継続的な検討課題である。

機能・用途の問題　すでに（上）において，観察可能な京都大学構内出土の資料にみられる使用の痕跡を検証し，著しい被熱は確認されないことと，少数だが内面に油煙や煤の付着する事例があることを指摘し，少なくとも製塩土器では無いものと述べてきた。今回の（下）において把握した資料については実見による検証を果たせていないけれども，特定の使用痕跡が報告で言及される事例はほとんどみられず，状況は変わらないと判断して良いと考える。そして，底部に焼成前や焼成後に穿孔する例が，14世紀以降を中心に一定数存在することも，把握出来た。京都大学構内出土の資料の場合は12世紀後葉の焼成後穿孔で，油煙痕の付着をともなっていたことから，灯火具としての転用の可能性に言及した。今回あらたに把握した底部穿孔例も，容器内面の様子は詳らかで無いが，同種の用途で用いられた可能性は十分に考えられよう。いずれにしろ製塩や焼塩の容器としては用を為さなかったことは明白である。

このようにみてくると，厚手鉢形土器の本来的な用途としては，一部は灯火具として利用・転用されたとしても，曲物内にそれを仕掛けて火桶として用いる火容製品であった，とする梅川光隆の想定が〔梅川2001　p.122〕，きわめて蓋然性の高いものと思われる。曲物が火桶としても使用されていることは，絵巻物の表現からかねてより認識されてきた〔南1982　第７図１〕。しかし，何らかの容器を内部に仕込んだ二重構造である表現がさ

れていながら，内容器に該当する製品については，梅川の指摘まで誰も言及してこなかった。口縁の内面に煤状の付着物が少なからず確認されることや，口縁部の周辺については内外とも器表面を平滑に仕上げていること（一方で，直接視認されることのないそれ以外の部分はほぼ未調整で，粘土紐積み上げ痕等がそのまま残されること）は，そのような使用法を想定すると，すぐれて腑に落ちる特徴といえる。

こうした土製火容製品の成立事情として梅川は，「中世都市民（一般都市民）が自立した家を営むものとして新興した」ことを背景に，狭い空間の最大限の活用にとって，手軽に設備や撤去できる利点を持った置き炉の普及，部品としての土製火容の需要が促されたものと推察している〔梅川前掲書　p.148〕。背景事情についてはさらに論証を深める必要があろうが，機能的な要求として手軽さがあったとするならば，時間的な変化の方向性として小型化の傾向が明瞭であることとは，きわめて整合的である。また，同時期にもっとも普遍的であった土師器皿類の製作集団がその生産と流通を担い，出土する空間からは特定階層との相関は見出しがたいことも，製品の役割を考慮すると納得されると言えよう。そして，最終的に，同種の機能を担う大和産火鉢の普及とともに姿を消すのである。

7　まとめと課題

本稿では，平安後期～鎌倉時代を中心とする時期の京都市域周辺で出土し，俗に「塩壺」と呼ばれてきた鉢形の土師器を検討対象とし，（上）（下）に分割して記述してきた。先行研究のみられない資料であることから，まずは基礎作業として実態把握を最大の目的として設定したが，結果として207例の報告（2022年３月末まで）を把握し，それらに基づいた資料の特徴抽出と時間的変遷の想定とともに，機能や系譜についても不十分ながら推論を及ぼすことができた。その際には，製塩土器との外見上の類似に由来する「塩壺」の俗称について，その用途を示す証拠は確認出来ないことから，今後は「厚手鉢形土器」と呼称することを提起した。以下，論じた要点３つを簡潔にまとめる。

１．資料の空間分布は，濃密な出土がある平安京の左京域と鴨東地域北半と，複数例の出土がみられる隣接周辺地域を基本的な分布圏として認定できる。ほか，宇治・八幡・湖西の遠隔で散発的出土を確認するが，洛西や乙訓といった西方では出土せず，京域主流土師器の分布域との相関が注意される。

２．時間的変遷については，12世紀後葉には明確に定型化して出現しており，14世紀代以降は出土量が減少し，15世紀代には消滅している。時期を追って口径・底径とも小型化

する傾向があり，直線的なバケツ形からコップ形へと推移している。また後半期にはミニチュア製品も顕在化する。

３．機能や系譜については，内面に油煙痕や煤付着がみられたり，底部に穿孔する例が少数ながらあることから，製塩や焼塩の容器ではなく，灯火器として転用を一部には含みつつ，梅川光隆が想定するような屋内置き炉用の火容の蓋然性が高いと推断した。またその製作技術は，京域や鴨東で主流の土師器皿製作集団が担いながら，平底の鉢形器形の創出にあたっては，痕跡の類似から，墨書人面土器底部における凹型成型などと関連する可能性について言及した。

（上）においては，京都大学構内出土資料が多くを占める鴨東地域北半の資料を対象としており，実査により器表面の状況や痕跡を観察した所見を反映させている。しかし，その他の地域を対象とした（下）では，資料の実見を果たせていないため，とくに３の機能や製作技術の系譜にかかわる議論は，想定の域を出ていない。今後それらを果たして，資料からの実証にもとづく議論へと高めていくことが，課題となる。

また，機能や系譜に関連する問題として，同時期に同じ機能を担う大型の火容製品として挙げられている瓦質の盤との関連については，今回全く対象外としている。今後は，それらも含めて総合的な検討をおこなうことで，住空間の変容をはじめとする古代から中世にかけての都市化の実相を解明することへつなげたい。

謝　　辞　新田和央氏（京都市文化財保護課）には，湖西地域における資料所在をはじめ，種々の教示を得た。末尾ながら御礼申し上げたい。

〔注〕

（１）戦国時代の遺構からの出土と報告される左京四条一坊跡の例については〔平安京調査会1975図版66－E526〕（表２－131），後述しているように，平安後期～室町期のものが混入したと見なす。また，左京八条一坊十六町跡において17世紀と報告される落込み165出土の例も〔京都市埋蔵文化財研究所2014　図30－137〕（表２－155），示された特徴で見る限り近世の焼塩壺ではなく中世の厚手鉢形土器の小形品であり，同じ遺構から出土している鎌倉後期の資料群と同時期に比定すべきものと考えている。

（２）左京九条三坊九町跡SD1750の最下層の灰粘層では，10世紀第１四半期ごろとされる黒色土器とともに「外面に粘土紐接合痕を多く残す粗製の鉢」「内面に被熱痕が残る」資料の出土が報告されている〔（公財）元興寺文化財研究所2019　p.68，図51－207〕（表２－195）。特徴から12～13世紀の厚手鉢形土器そのものとみられ，出土状況の検証が必要とおもわれることから，祖型的な事例の対象としては取り上げていない。

〔引用・参考文献〕

伊藤淳史・冨井眞・内記理　2016年　「京都大学吉田南構内ＡＭ21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度』
上村和直　　1992年　「人面土器製作技術の検討」『長岡京古文化論叢』Ⅱ
梅川光隆　　2001年　『平安京の器　その様式と色彩の文化史』
（公財）元興寺文化財研究所　2019年　『平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡』
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1998年　『水垂遺跡　長岡京左京六・七条三坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊）
（財）京都市埋蔵文化財研究所　2004年　『平安京左京北辺四坊－第１分冊（公家町形成前）－』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊）
（財）京都市埋蔵文化財研究所　2005年　『平安京左京六条三坊五町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-8））
（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2014年　『平安京左京八条一坊十六町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-16））
（財）古代学協会　1983年　『三条西殿跡』（平安京跡研究調査報告第７輯』）
宗教法人平等院　2003年　『平等院庭園保存整備報告書』
平尾政幸　　2019年　「土師器再考」『洛史』（（公財）京都市埋蔵文化財研究所研究紀要第12号）
平安京調査会　1975年　『平安京跡発掘調査報告－左京四条一坊－』
南　博史　　1982年　「絵巻物による曲物の一考察」『平安博物館研究紀要』第７輯

本稿は、2022～2024年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号22K00985「「都市化」とは何か－歴史都市京都近郊における長期的検証－」（研究代表者・伊藤淳史）にかかる研究成果である。

表２　鴨東地域北半における厚手鉢形土器報告資料一覧

洛東・洛南地区

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時期	文献	特徴備考
102	六波羅政庁跡	堀100	32	65	22	8.8	13.3	5B	1	図19－１
103	法住寺殿跡・六波羅政庁跡	井戸4-250	図版30	280	17.6			7A	2	
104	鳥羽離宮跡	SD1	図版45	24	19.2	8	9.2	6A	3	三足付 / 図19－11
105	桃陵	溝119	28	42	12.9			7A	4	

京北辺・上京地区

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時期	文献	特徴備考
106	相国寺境内	ESX601	16	24	10.5			7A	5	
107	常磐井殿町	SK306下層	図版７	87		4.5		7B	6	
108	常磐井殿町	SK308	図版８	29		6.9		8B	6	底部穿孔 / 図20－70
109	上京	土坑268	27	38	20.4			6A	7	
110	北辺三坊五町内膳町	SD353	50		16			7B	8	
111	北辺四坊	井戸 A309	図版66	66-50	22	6.8	12	6A	9	図19－15
112	北辺四坊	土壙 B1035	図版77	77-46		6.8		8B	9	図20－78
113	北辺四坊	土壙 B1037	図版69	69-39				7A	9	

洛北・嵯峨野地区

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時期	文献	特徴備考
114	鹿苑寺（金閣寺）	O区東側トレンチ	33	57		7.5		7B	10	底部穿孔 / 図20－55
115	常磐東ノ町古墳群		13	11	18	6	12.8	6B	11	
116	常磐仲ノ町	土坑286	49	106	10			7B	12	
117	一ノ井	井戸195	18	52	15.2			7A	13	

平安京左京域１（四条まで）　※左京一条二坊十二町→一・二・十二のように略記

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時期	文献	特徴備考
118	一・二・十二	中世包含層	15	86	13.2			8B	14	
119	二・三・九	土壙107	34	171	12.8	4.8		7A	15	図19－29
120	二・四・五	土壙3136	37	164	7.5	3	9.6	7B	16	図20－47
121	三・二・十	土壙1200	図版49	560	12.5			7C	17	
122	三・三・十一	土壙14	83	33	11.6			7C	18	
123	三・三・十二	A3土壙３	84	13	24.2			4A	19	三条西殿跡 / 図23－１
124	三・三・四	SX30	17	179	7.2		7.2	7A	20	
125	三・四・四	SK51下層	22	540		5.2		7A	21	
126	四・三・八	地下室581上層	34	240		4		7C	22	
127	四・三・八	地下室581最下	34	273	8	3.2	8.4	7C	22	図20－64
128	四・二・十四	SK2253	66	528		4.3		7A	23	
129	四・四・四	土坑墓 S380	24	25	8.4	3.2	8.4	7C	24	図20－73
130	四・三・十二	SE435	41	285	12.2			7B	24	
131	四・一	SK12	図版66	E526	32.8	12	12.8		26	四脚付？ / 図20－84 時期・出土状況要検討

表　　2

平安京左京域２（五条～八条）

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時期	文献	特徴備考
132	五・二・十六	土坑30	28	5	21.6			6A	27	
133	五・三・八	A・Bセクション第２・３層	65	1	16.4			6C	28	図19－40
134	五・三・八	A・Bセクション第２・３層	65	2	12	4	12.4	6C	28	図19－41
135	五・三・八	A・Bセクション第２・３層	65	3	14	6	14	6C	28	図19－42
136	五・三・十六	土坑212	34	241		3.8		7C	29	
137	五・三・九	土坑108	47	200	13.6	5	13.8	7A	30	図19－35
138	五・三・七	土坑5188	45	154	14.4	5.6	12.8	6B	31	図19－５
139	五・二・十一	地下室2123	29	100	16.2			7A	32	
140	五・二・十一	地下室2123	29	101		7		7A	32	
141	五・二・十一	地下室2123	29	102	18.6			7A	32	
142	五・二・十一	地下室2123	29	103	16.6			7A	32	
143	五・二・十一	地下室2123	29	104	18.4			7A	32	
144	五・二・十一	土坑墓2216	32	237	14.5			7A	32	
145	五・三・十五	№47土坑32	15	18	12	4	10.8	7A?	33	地下鉄烏丸線
146	六・三・八	SK376	附図30-1	57	14			7C	34	図20－58
147	六・三・七	土坑S239	73	1	12	5.4	10.8	7A	35	
148	六・三・十三	№55土坑12	52	№55-16	17.4	5.1	9.9	6A	36	地下鉄烏丸線
149	六・三・五	溝3250	図版36	36-10	17		10	4A?	37	三脚内面被熱/図23－7
150	六・二・十四	SE140	38	138		6.2		6C	38	全面被熱
151	六・二・十四	SD19上層	116	55	10.4	4	10.8	7C	39	図20－43
152	六・二・二	不明	7	11	13.2	4	13.2		40	詳細不明
153	七・三・五	SE131	25	8	16	6	10.7	6B	41	東本願寺/図19－26
154	七・二・五	土坑612	13	204	13.8			6B	42	龍谷大学大宮
155	八・一・十六	落込み165	30	137	8.8	5.2	8.8	7C?	43	遺構は近世
156	八・一・十六	SD175	図版30	89	13.2			7A	44	
157	八・二・九	土坑S2146	30	10	16.4			6A	45	
158	八・二・九	墓S81	35	1	15.6			7C	45	
159	八・二・九	墓S81	35	2		4.8		7C	45	
160	八・二・十五	井戸25	図版８	107	13.6	4.8	12	6C	46	図19－19
161	八・二・十五	土壙20	図版８	93	6.8	2.8	7.2	7C	46	図20－51
162	八・二・十五	包含層	17	150	6.8	2.4	6.8	7C	46	
163	八・三・三	埋甕土壙273	58	17	14.1			6A	47	
164	八・三・三	埋甕土壙273	表３						47	体部のみ
165	八・三・二	G27P18	49	17	12			7A?	48	
166	八・三・二	G27P18	49	18	16	6	12.8	7A?	48	
167	八・三・二	G27P18	49	19	14.8	4.2	14.4	7A?	48	
168	八・四・七	SK216	13	69	12.8			6C	49	
169	八・三・一	井戸399	11	146	18.2	7.2	16.9	7C	50	東本願寺前古墓群
170	八・三・九	土坑115	23	141		6		6C	51	
171	八・三・九	SK330	61	700	13	4.8	12.7	7B	52	東本願寺前古墓群
172	八・三・九	SK740・741	63	791		5		7B	52	東本願寺前古墓群
173	八・三・九	SE971	69	973		5.2		7C	52	東本願寺前古墓群

平安京左京域３（八条～九条）

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時期	文献	特徴備考
176	八・三・七	SK107	21	496		2		7C?	53	
177	八・三・七	SK458	21	497		5.6		7C?	53	
178	八・四・一	土坑3724	図版132	503	7.2			7B	54	
179	八・四・一	土坑3724	図版132	504		3.2		7B	54	
180	八・三・四五	１区土坑137	図版57	141	24.6		9.65	6A	55	図19－８
181	八・三・四五	１区土坑86	図版58	203	23		9.8	6B	55	
182	八・三・四五	１区土坑86	図版58	204	26.6		9	6B	55	
183	八・三・四五	１区土坑271	図版59	339	21.6			6B	55	図19－23
184	八・三・四五	１区土坑108	図版61	477	25		10.3	6C	55	
185	八・三・四五	１区土坑108	図版61	478	26		7.4	6C	55	
186	九・二・十六	整地層	24	17	12			6A?	56	
187	九・二・十六	整地層	24	18	20			6A?	56	
188	九・三・九	不明	9	51	15.2	7.2	8.8	6A?	57	出土状況不明
189	九・三・九	不明	9	52	15.2	6.4	8.8	6A?	57	出土状況不明
190	九・三・九	不明	9	53	16	6	10.4	6A?	57	出土状況不明
191	九・三・九	不明	9	54	16.8	6	9.6	6A?	57	出土状況不明
192	九・三・九	不明	9	55	16.8	6	10.4	6A?	57	出土状況不明
193	九・三・九	不明	10	62	10			6A?	57	出土状況不明
194	九・三・八	整地層	14	49		4.3		6B?	58	
195	九・三・九	SD1750灰粘	51	207	20			6A?	59	時期・出土状況要検討
196	九・三・九	SD0430上層	80	233	16.8			6A	59	
197	九・四・二	土坑3060	16	66	17.2	6.8	13.6	6A	60	

京都市外（八幡・宇治・湖西地区）

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時期	文献	特徴備考
198	女郎花（第８次）	C区北池状遺構SG27上層	24	16	16.6			6A	61	
199	浄妙寺跡	SK40101	PL.18	80	20.4			6B	62	
200	平等院境内	阿字池西岸12次P-7区砂層	図版100	1254	12			8A?	63	時期・出土状況要検討（図22）
201	平等院境内	阿字池西岸12次P-7区砂層	図版100	1255	13.2			8A?	63	時期・出土状況要検討（図22）
202	平等院境内	阿字池西岸12次P-7区砂層	図版100	1256				8A?	63	時期・出土状況要検討（図22）
203	平等院境内	阿字池西岸12次P-7区砂層	図版100	1257		5.6		8A?	63	時期・出土状況要検討（図22）
204	平等院境内	阿字池西岸12次P-7区砂層	図版100	1258	14			8A?	63	時期・出土状況要検討（図22）
205	平等院境内	阿字池西岸12次P-7区砂層	図版100	1259	14			8A?	63	時期・出土状況要検討（図22）
206	平等院境内	阿字池西岸12次P-7区砂層	図版100	1260		4.2		8A?	63	時期・出土状況要検討（図22）
207	上仰木	包含層	図版52	449	19.2			6A	64	

＊口径・底径・器高は基本的に報告書の挿図より計測したが，観察表に記載のあるものはその数値を採用した。
＊時期は，出土遺構の共伴土師器皿類等を〔平尾2019〕により比定した。

報 告 文 献

報告文献（番号は表２と対応）

1 （株）文化財サービス2019『六波羅政庁跡、音羽・五条坂窯跡発掘調査報告書』
2 （財）京都市埋蔵文化財研究所2009『京都国立博物館構内発掘調査報告書－法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡－』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊）
3 吉崎伸・鈴木久男1985「23第88次調査」（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』
4 （財）京都市埋蔵文化財研究所2015『伏見城跡・桃陵遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-2）
5 大本山相国寺承天閣美術館1984『大本山相国寺境内の発掘調査－承天閣地点の埋蔵文化財－』
6 同志社大学校地学術調査委員会1978『常磐井殿町遺跡発掘調査概報』
7 （財）京都市埋蔵文化財研究所2011『上京遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-2）
8 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター1988『京都府遺跡調査概報第27冊』
9 （財）京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京北辺四坊－第Ⅰ分冊（公家町形成前）』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊）
10 （財）京都市埋蔵文化財研究所1997『特別史跡特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊）
11 （財）京都市埋蔵文化財研究所1977『常磐東ノ町古墳群』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第１冊）
12 （財）京都市埋蔵文化財研究所2011『常磐仲ノ町遺跡・常磐東ノ町古墳群』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-15）
13 （株）文化財サービス2021『一ノ井遺跡発掘調査報告書』（文化財サービス発掘調査報告書第18集）
14 （財）京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京一条二坊十二町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-18）
15 古代文化調査会2016『平安京左京二条三坊九町・旧二条城跡・烏丸丸太町遺跡－大門町の調査－』
16 （株）イビソク関西支店2014『平安京左京二条四坊五町跡・烏丸丸太町遺跡』（イビソク京都市内遺跡調査報告第７輯）
17 （財）京都市埋蔵文化財研究所2008『平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-17）
18 （財）古代學協會1984『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町跡』（平安京跡研究調査報告第12輯）
19 （財）古代學協會1983『三条西殿跡』（平安京跡研究調査報告第７輯）
20 京都市文化市民局2020「Ⅱ－１平安京左京三条三坊四町跡・烏丸御池遺跡」『京都市遺跡試掘調査報告令和元年度』
21 （財）京都市埋蔵文化財研究所2003『平安京左京三条四坊四町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-10）
22 （財）京都市埋蔵文化財研究所2013『平安京左京四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-2）
23 （財）京都市埋蔵文化財研究所2003『平安京左京四条二坊十四町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-5）
24 京都府京都文化博物館1993『平安京左京四条四坊四町跡』（京都文化博物館調査研究報告第９集）
25 （財）京都市埋蔵文化財研究所2007『平安京左京四条三坊十二町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-26）
26 平安京調査会1975『平安京跡発掘調査報告－左京四条一坊－』
27 京都府京都文化博物館1991『平安京左京五条二坊十六町』（京都文化博物館調査研究報告第６集）
28 （財）古代學協會1997『平安京左京五条三坊八町発掘調査報告』（平安京跡研究調査報告第19輯）
29 （財）京都市埋蔵文化財研究所2013『平安京左京五条三坊十六町跡・烏丸綾小路遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-21）
30 （財）京都市埋蔵文化財研究所2008『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-10）
31 （株）イビソク関西支店2017『平安京左京五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡－白楽天町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財研究所発掘調査報告書－』（イビソク京都市内遺跡調査報告第15輯）
32 （財）京都市埋蔵文化財研究所2017『平安京左京五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-8）
33 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1976『烏丸線内遺跡調査抄報』Vol.14
34 平尾政幸2019「土師器再考」『洛史』（（公財）京都市埋蔵文化財研究所研究紀要）第12号
35 京都府京都文化博物館1995『平安京左京六条三坊七町』（京都文化博物館調査研究報告第11集）
36 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1981『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』本文編

37 （財）京都市埋蔵文化財研究所2005『平安京左京六条三坊五町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-8）
38 （財）元興寺文化財研究所2017『平安京左京六条二坊十四町跡・烏丸綾小路遺跡』
39 （財）京都市埋蔵文化財研究所2012「25平安京左京六条二坊十四町跡・猪熊殿跡・本國寺跡」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』
40 （財）古代學協會2008「平安京左京六条二坊二町馬淵診療所新築工事に伴う調査」『平安京左京内５遺跡』（平安京跡研究調査報告第23輯）
41 （財）古代學協會1985『平安京左京七条三坊五町』（平安京跡研究調査報告第15輯）
42 龍谷大学2018『平安京左京七条二坊五町（東市跡）発掘調査報告書』
43 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2014『平安京左京八条一坊十六町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2013-16）
44 関西文化財調査会2004『平安京左京八条一坊十六町』
45 京都平安文化財2020『平安京左京八条二坊九町』（京都平安文化財発掘調査報告第７集）
46 （株）日開調査設計コンサルタント2007『平安京左京八条二坊十五町』（（株）日開調査設計コンサルタント文化財調査報告書第１集）
47 上村憲章1999「８平安京左京八条三坊１」（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成９年度京都市埋蔵文化財調査概要』
48 （財）古代學協會1983『平安京左京八条三坊二町』（平安京跡研究調査報告第６輯）
49 （財）京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京八条四坊七町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-11）
50 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2020『平安京左京八条三坊一町跡・東本願寺前古墓群』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-10）
51 （財）京都市埋蔵文化財研究所2010『平安京左京八条三坊九町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-6）
52 （公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター2017『平安京跡・東本願寺前古墓群』（京都府遺跡調査報告書第169冊）
53 （財）京都市埋蔵文化財研究所1982『平安京左京八条三坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第６冊）
54 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2019『平安京左京八条四坊一町跡・御土居跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018-13）
55 （財）京都市埋蔵文化財研究所2009『平安京左京八条三坊四・五町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-7）
56 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2015『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-9）
57 堀内明博・江谷寛2008「平安京左京九条三坊九町跡三越ユニティー用地」（財）古代學協會『平安京左京内５遺跡』（平安京跡研究調査報告第23輯）
58 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2021『平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020-7）
59 （公財）元興寺文化財研究所2019『平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡』
60 （株）イビソク2019『平安京左京九条四坊二町跡・烏丸町遺跡』（イビソク京都市内遺跡調査報告第21輯）
61 八幡市教育委員会2007『女郎花遺跡（第８次）発掘調査報告書－八幡大芝53-1他宅地造成に伴う調査－』
62 宇治市教育委員会2004『浄妙寺跡発掘調査報告書』（宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第87集）
63 宗教法人平等院2003『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』
64 大津市教育委員会2013『上仰木遺跡発掘調査報告書』（大津市埋蔵文化財調査報告書65）